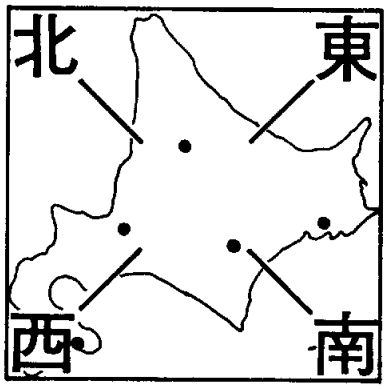
NC 自然・環境・人

No.49

北海道自然保護協会会報
Nature Conservation Society of Hokkaido

1984年12月号

美笛の森　網島　正人



春国岱 野鳥公園化の現状

三浦　二郎

「白鳥の湖」として知られる風蓮湖の、一方の湖口をふさぐ形で春国岱の砂丘がある。ここを訪れるナチュラリストは誰もがその魅力にとりつかれるようで、中には飛行機とレンタカー或いはフェリー利用で一年に一度以上来なければ気のすまない本州からの来訪者もいる。

とにかく、海岸砂丘のハマナス群落の深紅の花が香りを放つ時期はとりわけのこととして、シュンク（アカエゾマツ）の濃緑の森林が海抜0mの地帯に残されていること自体が現代の驚異である。まだ春国岱がそれほど世間に知られていない頃、たまたま冬にここを訪れた物好きなバードウォッチャーが、このアカエゾマツのこずえに点々とオオワシが止まっていたのをカウントしたら、七十数羽もいたので「オオゼイいるからオオワシなんだろう」とジョークを飛ばしたというエピソードが残っている。そういう外来のナチュラリストの観察も含めて、春国岱とその周辺で確認された鳥種は二二八種にものぼる。

だからラムサール条約の指定湿原候補の筆頭にあげられたのも当然と云える。しかし、文化庁からの天然記念物指定も、環境庁からのラムサール条約湿原指定も地元自治体は無下に返上したのである。ひとえに開発行為規制への警戒からである。

その自治体側から春国岱野鳥公園構想が打ち出され、日本野鳥の会に調査設計の委託がなされ、昭和五七年基本構想、五八年基礎調査、そして本年度は基本設計と作業が進められている。その経過の中で、昨年度の基礎調査の成果を地元に還元しようということで、五月二六～七日に地質部門指導担当の本協会々長八木先生始め数名の研究者を招いて「春国岱その生いたちと素顔」と題したシンポジウムを開催したのである。しかしその折八木先生が「根室地方には二～三〇年後に大地震が発生する予想がある。その時このような軟弱な地盤の上に大きな構造物があると流砂現象が発生するおそれがある」と指摘されたのだが、それに対する理事者側の狼狽ぶりはひどいものであった。湾岸道路建設の免罪符としての野鳥公園構想という衣のそでのよろいをチラッとのぞかせた感がしたものである。

道路建設とは全く無関係であるとされながら、昨年六七〇m、それが今年度は更に七〇〇m延長されて外洋側に消波ブロックが投入され、美しい天然のなぎさが春国岱から失われつつある。

どういう裏や思惑があるにしても、地元野鳥の会支部としては野鳥公園実現に向けて努力したいと考えている。本協会々員諸賢の御声援をお願いしたい。ただ「春国岱野鳥公園」という名称は、野鳥だけを対象とする印象があるので、もっと広範な自然を対象とした名称にしたいという話がもち上っているので、それについてよいお知恵も頂けたら幸いである。

（日本野鳥の会根室支部長・中標津町在住）

「核」と人間の将来 「核」と共存できるか！

星野　花枝

今、私が大事に飾っている一枚の写真がある。岩礁群が影を落す細波も立てない海に、美事な落日がまさに沈もうとしている瞬間の写真なのだ。今はもうない海――泊原発現場の数年前の姿である。

自然破壊の最たるものが核による破壊と汚染で、まかり間違えば地球そのものの生命を閉ざす事になるのは数々の研究と、その報告が証明している。実験の結果、核シェルターでは生き残れないと判ったし、たとえ生き残ったとしても異常気象が「核の冬」をもたらし生物は死滅する。その「核の冬」は現在地球上にあるたった0.5%の核兵器使用で訪れる。〝まさか使われないだろう〟という非常にあい味な「信頼」の上に私達は日々の安穏

を託しているわけで、まともに考えたら気がおかしくなるからだ。しかしこれ以上地球破滅の種を増さない努力をするのが、せめてもの今生きている人間の為すべき事ではあるまいか。

少し前までは「平和利用」の名のもとに、原爆と原発を区別する考えもあったが、原発から生じるプルトニュームで簡単に原爆が作られてしまって、だから原発は厳重な管理下に置かれることになって、この区別は意味のないものになってしまった。

技術的に未解決のまま作り続けた原発は、漁場をつぶし、被爆労働者を生み、更に世界中から持て余された危険な核ゴミ捨場、再処理工場が下北半島と北海道に出来ようとしている。悲しいことにそこは過疎の地、今、金が落ちるなら将来子供達の生命を脅かす物もあえて誘置しようとする。

電気が不足だから、コストが安いからという原発建設の大義名分は今や通ぜず、一ときの巨大土木工事と原子力産業を肥やすだけ。我々の税金と電気料がその後始末をする仕組みになっている。米国は現在、自国での建設を中止、同盟国に押し売りの状態で、これは国際政治、国策レベルで進められているものなのだ。

宇宙へロケットで放つ案まで出た厄介物の核廃棄物は、一万年先まで開けられない「パンドラの箱」とあって、学者達が真面目に考え出したのはストーンヘンジを模したものだという。文字は一万年後迄の伝達方法としては役に立たず「語り部」による云い伝えで「祟りの場」から人を遠ざけるのが最も確実だという結論は、何とも皮肉でこっけいな話だが第一、一万年保存できる容器も技法も未だ見つかっていない。一万年どころか、あと10年足らずで続々廃炉になる原発それ自体の処理さえメドが立っていない。放射能を出し続ける巨大な炉をどうやって封じ込めておけるのか。

思い上った人間が目の前の欲にかられて、この地球の生命を破滅の淵に追いやろうとしている。作ったのも人間なら、ブレーキをかけるのも人間しかない。天災じゃないのだ。我々が子孫に残すストーンヘンジは、おおらかに自然を讃美するものでありたい。

（函館YWCA責任幹事・南北海道自然保護協会理事・函館市在住）

ハシブトガラ受難

福地　郁子

今年も後一ケ月たらずとなり、悔まれる事の多い季節となりました。世間では今年の10大ニュースになるであろう、グリコ・森永事件の未解決、自然保護関係では、日高横断道の着工、千歳川放水路の急いだルート決定の動き等、まったくもう…と云う感じです。

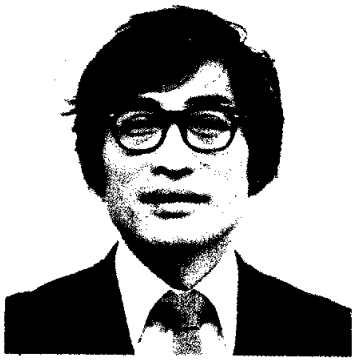
煩雑な事に毎日追れながらも、去年同様、準指導員（スキー教師）のテスト（理論と実技）を受ける破目となり準備をしようと一日、家に居た時の事です。朝から水槽の和金魚が水草に卵を生みつけているので、生む片っぱしから他の水槽にうつしていました。ちょっと外に目を移すとバードテーブル近くのクワの木にジョウビタキらしい鳥が美しい衣装を着て、来ているではありませんか。ゆっくり観察し満足しました。

我家は藻岩山の木立の中にあります。ベランダに大変近い古いナシの木にバードテーブルをおいていますが、そばにハルニレや山グワの大きな木があるため小鳥はあまり用心しないでエサ台にやって来ます。毎年エサの入れ始めは10月末位ですがこれも鳥達の熱い催促で、入れる破目になります。冬中、格好のエサ場になっているらしいです。随分多くの種類と多い数の鳥が集まります。はたして良いのか悪いのか、分かりませんが…。

つい先日もベランダの所にヒマワリの種をまいておいたところ、いつものハシブトガラが夢中で食べていました。その後から猫がのそり、一瞬の差でのがれる事が出来ましたがツメで尾羽をぬかれてしまったのです。そして一本しか尾羽が残っていない悲しい格好になってしまいそれはタケヒコウキが飛んでいるような姿です。でも元気な様子でエサ台に来るので、ホッとしていました。ところがその日、大きく空の写っているベランダのガラスにすごいスピードのハシブトガラが突進して来たのです。大きいぶつかる音と共に下に落ちて気絶していました。私はビックリして外に出て拾い上げ手の中で暖ため、スプーンから水を飲ませたところ元気になりました。ひょっと尾を見ると尾羽一本のタケヒコウキ君ではありませんか。尾が一本ではうまく方向転換が出来なかったのだと思い可愛想になりました。又、突き詰めるとエサ台等で鳥を呼びよせた私の責任ではないかと複雑な気持になりました。たった一日ですがバードテーブル周辺では何かしら事件が有ります。それにつけてもハシブトガラのタケヒコウキ君の尾羽はもう、はえてこないのでしょうか？

（主婦・札幌市在住）

ESSAY



ヤギの声・樹の声

文・加藤　多一

オレはただの生きものなんだな、とつくづく思うことがある。

この思いは五十歳になった今年の秋ごろから急に強くなった。かぜで頭痛がしたり体力がなくなったり、同年輩の友人に死なれたことも影響しているかもしれない。

バスの中で赤んぼうの泣き声を聞いたり、草むらにネコがひそんでいるのを見たりすると、自分もこわれやすい心身を持った同類なのだと突然自覚する。

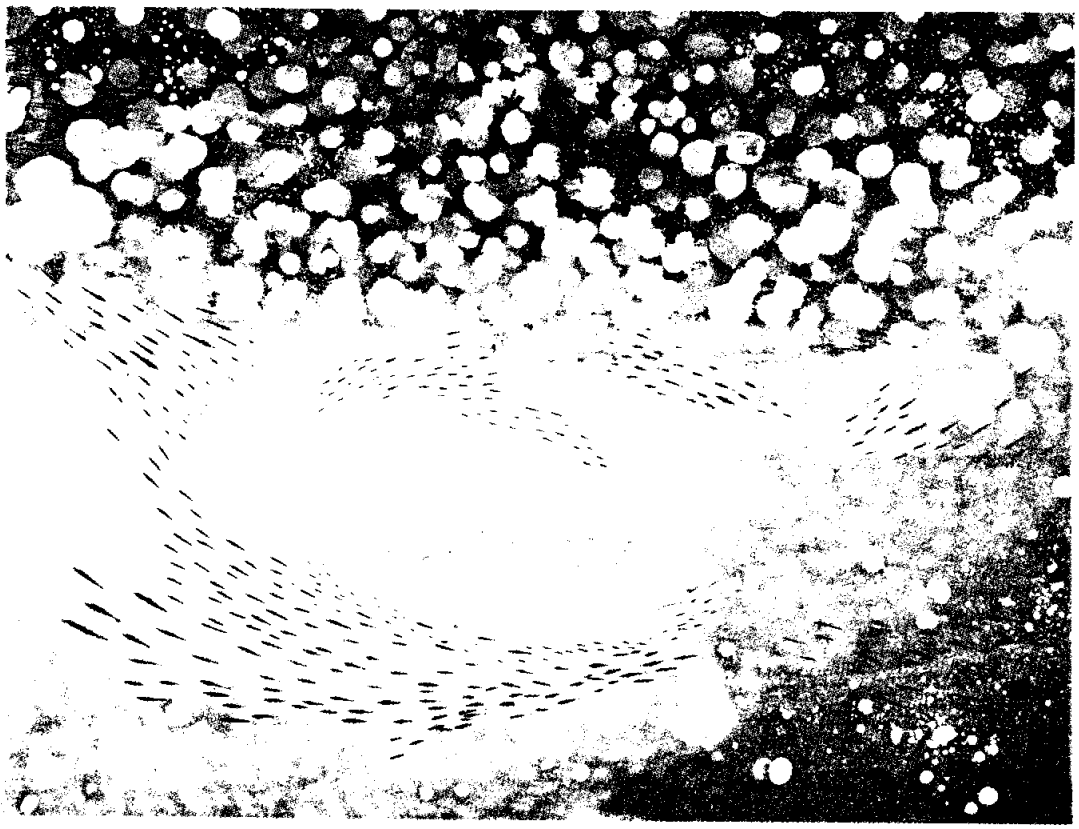
そのくせ、ヤマベ釣りでは魚たちを殺す。でも、稚魚は逃がす。これほどヤマベの姿態にほれて、食うときは骨も頭もありがたく全部いただくのだから、かんべんしてくれや。そして今度はもっと大きくなって、仲間をごっそり連れてやってきてくれ。他の人の針でなく、オレの針にだけ集まってくれるようにみんなに言っといてくれ。こう言いきかせてから、てのひらから去っていく稚魚を見送る。

生き物は声を出す、ということを体得したのは幼児のころだったと思う。なにしろ農家の子だったので、ウマ、メンヨウ、ヤギ、ニワトリ、アヒルと動物の鳴き声にかこまれていた。

空腹のときのニワトリの鳴き声はひどい騒音だが、のんびり散歩しながら地中の虫をさがして歩くときのメンドリのおばさんたちの声は、のどかでいいものだ。

オンドリがエサを見つけて、メンドリを呼んでいる。エサをついばんでみせ、それをまた土に落としては、発見の喜び・自分でついばむ喜びを伝えようとする。

〈ク・ク・ク〉という含み声が、純粋



「MEDAKA SCHOOI 'V」 艾沢　詳子（版画家・札幌市在住）

に家長としての権威と責任感から出ているものか、それともひときわ美しいメンドリをおびきよせてひらりとその背中に乗っかる下心を持ったものか。その声の違いは微妙だ。

ヤギのせつないときの声は、ほんとうに体全体でしぼり出すように出てくる。

遊びすぎて、夕方の乳しぼりの時間に遅れたことがある。

ヤギは草原につながれているから、時間も空間も半径三メートルの円のうちに限られている。あたりはもう夕闇がせまって、笹やぶの奥にはけものたちの吐く息がある。

乳房は固く張っているし、眼のまわりと乳房にはブヨがささる。

ヤギはさぞかしせつなかったろう。人間の女性のうらみ泣きのように、長く絶え絶えにひっぱる泣き声は、あきらかに言語を持っているようであった。

萱野茂さんの著書「おれの二風谷」を読んで突如著者に会いに行ったのは何年前のことであったか。彼も喜こんでくれて「ほら、あそこにカッコウが鳴いている」と空を指した。見ると、あのシマ模様がはっきり。二風谷でもこんなに間近かに見られるのは珍しいという。「歓迎しているのです」と萱野さんがいう。私もほんとうにそう思った。

その萱野さんが、泊原発の可否論争、補償金さわぎのころ、「魚たちの声を聞いたか」と書いたことがある。

いま、幌延の核廃棄物関連施設についての問題が起きている。安全ですと説く人も、安全に疑問を持ちながらも地元のなにがしかの利益のために反対を表明しにくい人々も、せいぜい十年先ぐらいのことしか考えていない。

かりに研究が進んで五十年間は安全だという確証が出たとしても、五十一年目はどう考えればいいのだろう。

どうせ絶対のものはないのだからひとつ地元の意見を聞いて——というコースが見えてくる。

だが、地元の声とは何だろうか。

町長、知事、議会、近隣市町村長の意見だけで十分なはずがない。

十年後に生まれてくる人間の声、七百一年目に結婚する男女の声をどうするのでしょう。

樹の声は聞かなくてもいい、と断言できますか。

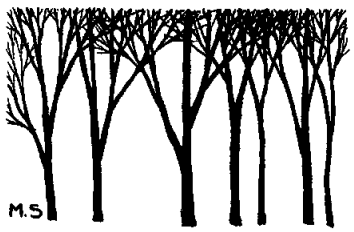
もし「地元の声」というならば、幌延町および留萌管内と宗谷管内のすべての乳牛たちの賛否の声を数に入れていただきたい。

それにすべての野の草、野の花、野の鳥たちの声も聞いてほしい。

魚たちの声を聞くのは手数がかかるけれど、補償金に類するものをもらえない魚たちの、せめて意見だけは聞くべきだ。

なぜなら、五十年後に四十歳である人間の意見をいま聞くことができないからだ。十年後生まれてくるはずの人間の声は、すなわち、いま生きている樹や魚や乳牛たちの声だと思う。

（日本童話会会員・札幌市在住）



自然豆事典

地球的規模で進行する環境汚染のもっとも大規模で、救いがないようにみえるもののひとつに大気中の二酸化炭素の増加と、酸性雨の拡大とがある。

〔酸性雨の増加〕 二酸化炭素は化石燃料の燃焼によって炭素が大気中に放出することによってふえる。これまでの時代は、二酸化炭素がふえても、その量は巨大ではなく、しかも地球上にひろがっていた森林が炭酸同化作用により二酸化炭素(CO_2)を吸って炭素（C）を体の一部とし、かわりに酸素（O）を放出していてくれていた。

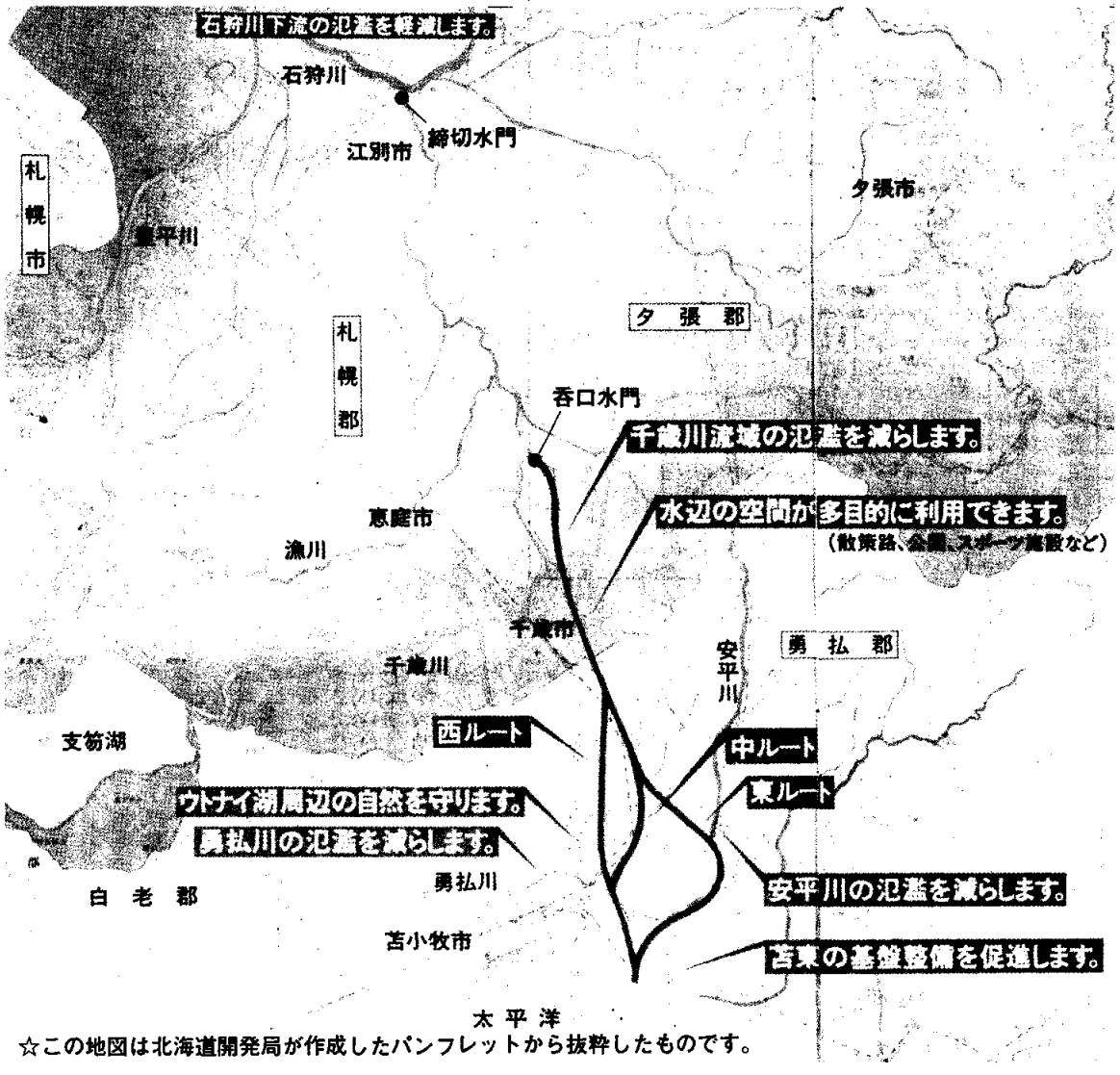
しかし1950年には陸地面積の37%だった世界の森林が1978年には20%と減り続けているために二酸化炭素を吸収しきれなくなってきたのである。二酸化炭素がふえると大気は一般に劣化する。そして、おそろしいのは二酸化炭素の分子が地球の表面から大気圏外に放射される熱線を吸収するため地球全体の気温をあげることである。気温があがれば農作物の生産に異常がまず出る。そして大気にふれている海水温も上昇する。海水温が上昇すれば南極大陸の氷がとけ出し、全部とけると海水面を60～70m上昇させて、人類の大半が住んでいる平野の大部分は水没すると予想されている。

〔酸性雨〕 これも化石燃料の燃焼によって起こる。石油、石炭、天然ガスをもやせば酸化イオウ（SO_2）と酸化窒素（NO）が大気中で生成する。現在、大気中に放出されているイオウ分（S）は年間7500万トン、窒素分（N）は2000万トンと推定されているほどの量である。SO_2とNOは大気中にふくまれている水分と反応して酸性の溶液となり、雨や雪として地上に降る。このような酸性雨は、風の向きや強さによって発生源から数千kmはなれたところにも降る。いちばん先に気づかれた酸性雨の影響は、魚が生息できなくなった湖や川が欧米でふえたことであった。近年では森林に酸性雨が降ることによって樹木が枯死しはじめている。雨や雪が酸性化すれば当然ながら大地や川水、地下水も酸性化する。これによって水道管の鋼のパイプが溶け出したり、土の酸性化によって溶けた金属が食物連鎖を通じて人体に吸収されることが心配されている。（以上は主に『西暦2000年の地球』、『昭和59年版環境白書』による）

以上のことからみても、化石燃料の大量消費は環境に対してもすでに限界に達しているとみるほかはない。化石燃料の大量消費をやめるには①エネルギー源を原子力に転換するか②エネルギー消費そのものを抑制する生産様式に転換するか③あるいは重水素を使用する核融合炉（による発電）を実用化すると同時に、エネルギー多消費型の生産構造から省資源・省エネルギーのできる生産構造に変えていくしかない。人類がこれからも長く存続できるためには、おそらく最後の道をとるしか方法はないだろう。

文責：紺谷友昭（大谷短大講師）

千歳川放水路問題について!!



☆この地図は北海道開発局が作成したパンフレットから抜粋したものです。

支笏湖を源とし、延長七十二キロの千歳川は、明治三十一年以来、今日まで、八十七年間に三十八回の洪水を起こし、流域の低平地帯に大きな被害を与えてきた。

このため、千歳川、石狩川の洪水防御対策の一つとして、千歳川放水路計画が検討され、昭和五十七年三月に改定された石狩川水系工事実施基本計画に当該計画がもりこまれた。

当該計画は、千歳川中流部に位置する大学排水付近から、水路延長約三五～四〇キロ、幅約三〇～四五〇メートルの水路で太平洋へぬき、洪水時に最大毎秒一二〇〇立米の流水を放流するものである。

石狩川本流と千歳川の合流点に締切水門を設け、さらに大学排水付近に呑口水門を設ける。そして、平常時には今まで通り千歳川から石狩川へ水を流すが、洪水時には締切水門を閉鎖し、呑口水門を開いて千歳川の水を太平洋に落とそうとするものである。

放水路の候補ルートとしては、現在、次の三案が考えられている。

○東ルート

国鉄千歳線の東側から遠浅川、安平川に合流する案

○中ルート

遠浅川から苫小牧東部工業基地の北西部を通り、ウトナイ湖の下流で勇払川へ合流する案

○西ルート

美々川本流からウトナイ湖を通り、安平川に抜ける案

しかし、この放水路計画については、計画発表以来、いろいろな問題が指摘され、特に自然保護の観点から憂慮の声がだされている。

西ルートは、国設の鳥獣保護区特別保護地区であるウトナイ湖を直撃すること。また、中・東ルートも美々川源流部を通過するため、ウトナイ湖に水を供給している同河川の水量減や動物の生息環境への影響など、自然環境への影響が心配される。

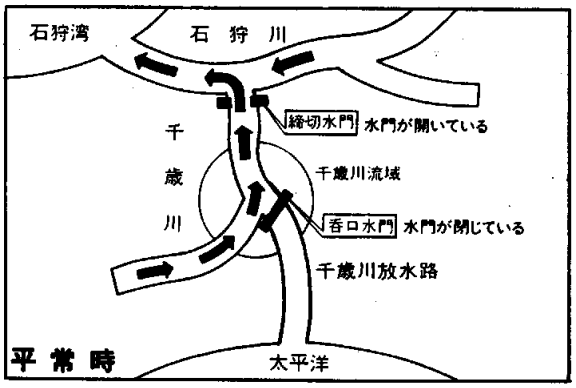
また、農業へ与える影響として、丘陵部の開削により、太平洋側の霧の流入等、局地気象の変化による影響が心配される。

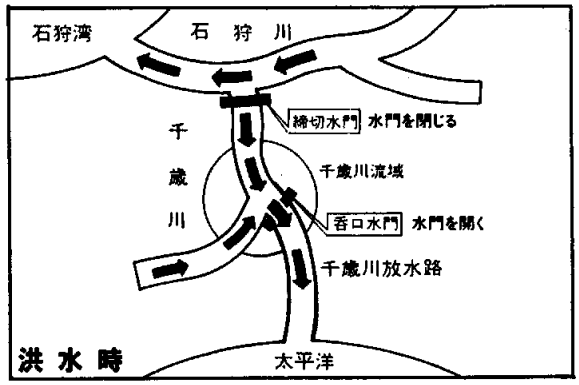
さらに、千歳川のサケふ化事業への影響をはじめ、日本海及び太平洋沿岸における漁業への影響も心配されている。

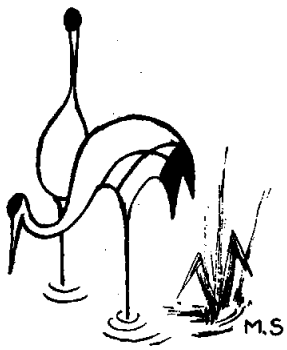
このような大規模計画は、広く自然環境に影響を与えることが予想されるので、時間をかけた十二分な検討が必要であり、次代に禍根を残すことを憂慮し、以下のような、北海道開発庁長官、環境庁長官、北海道知事あて要望書を提出したものである。

○放水路のしくみ（図）

二ケ所の水門操作で、洪水時の流水の流れを切りかえる







HNCS第四四五号
昭和五十九年十一月十六日
北海道知事　横路　孝弘殿

社団法人　北海道自然保護協会
会長　八木　健三

千歳川放水路計画再検討に関する要望書

千歳川放水路計画については、いずれのルートをとるにせよ、広く自然環境に影響を与えることが予想される。

とくに幅三〇〇ｍに及ぶ堀割が二〇～三〇ｍの丘陵部を掘削することにより、太平洋よりの風や霧の流入など、局地気象の変化による農業への影響が憂慮され、また農地の分断や削減にともなう支障も大きい。さらに千歳川のさけふ化事業への悪影響もさけ難い。貴重な美々川・ウトナイ湖の自然環境が、源流部の掘削により、重大な破壊を被ることはすでに明白である。

しかも注目しなければならないのは、二〇～三〇年と目される放水路完成時まで、この放水路は千歳川流域の洪水防止に、何等実効を発しないことで、これは計画書にも明白に示されている。

大規模な自然改造が、いかに予測せざりし影響を与えるかについては、世紀の事業と称せられたナイル河のアスワン・ハイダム、洪水の防止、農耕地の増加をもたらした反面、土壌塩害の拡大、デルタ地域の侵食など、不測の被害を生じつつあることは、もって他山の石とすべきであろう。

以上の見地より、われわれは北海道開発庁長官に対し、本計画を根本的に再検討すべきことを要請した。これに関連し最近明かにされた道自然環境保全地域指定原案に美々川源流部が除外されていることはきわめて遺憾である。

北海道自然環境保全一〇〇年の計をたてるために、千歳川放水路計画に対し慎重に対処されることを要望する。

HNCS第四四五号
昭和五十九年十一月十六日
環境庁長官　石本　茂殿

社団法人　北海道自然保護協会
会長　八木　健三

千歳川放水路計画再検討に関する要望書

千歳川放水路計画については、いずれのルートをとるにせよ、広く自然環境に影響を与えることが予想される。

とくに幅三〇〇ｍに及ぶ堀割が二〇～

三〇mの丘陵部を掘削することにより、太平洋よりの風や霧の流入など、局地気象の変化による農業への影響が憂慮され、また農地の分断や削減にともなう支障も大きい。さらに千歳川のさけふ化事業への悪影響もさけ難い。貴重な美々川・ウトナイ湖の自然環境が、源流部の掘削により、重大な破壊を被ることはすでに明白である。

しかも注目しなければならないのは、二〇～三〇年と目される放水路完成時まで、この放水路は千歳川流域の洪水防止に、何等実効を発しないことで、これは計画書にも明白に示されている。

大規模な自然改造が、いかに予測せざりし影響を与えるかについては、世紀の事業と称せられたナイル河のアスワン・ハイダムが、洪水の防止、農耕地の増加をもたらした反面、土壌塩害の拡大、デルタ地域の侵食など、不測の被害を生じつつあることは、もって他山の石とすべきであろう。

以上の見地より、われわれは北海道開発庁長官に対し本計画を根本的に再検討すべきことを要請したが、環境庁長官におかれても、自然環境保全一〇〇年の計をたてるために、本計画に対し慎重に対処されることを要望する。

HNCS第四四五号
昭和五十九年十一月十六日

北海道開発庁長官　河本　嘉久蔵殿

社団法人　北海道自然保護協会
会長　八木　健三

千歳川放水路計画再検討に関する要望書

千歳川放水路計画については、いずれのルートをとるにせよ、広く自然環境に影響を与えることが予想される。

とくに幅三〇〇mに及ぶ堀割が二〇～三〇mの丘陵部を掘削することにより、太平洋よりの風や霧の流入など、局地気象の変化による農業への影響が憂慮され、また農地の分断や削減にともなう支障も大きい。さらに千歳川のさけふ化事業への悪影響もさけ難い。貴重な美々川・ウトナイ湖の自然環境が、源流部の掘削により、重大な破壊を被ることはすでに明白である。

しかも注目しなければならないのは、二〇～三〇年と目される放水路完成時まで、この放水路は千歳川流域の洪水防止に、何等実効を発しないことで、これは計画書にも明白に示されている。

大規模な自然改造が、いかに予測せざりし影響を与えるかについては、世紀の事業と称せられたナイル河のアスワン・ハイダムが、洪水の防止、農耕地の増加をもたらした反面、土壌塩害の拡大、デルタ地域の侵食など、不測の被害を生じつつあることは、もって他山の石とすべきであろう。

北海道の自然環境保全一〇〇年の計をたてるために、本計画を根本的に再検討すべきことを、ここに強く要請する。

千歳川放水路で水害は防げるか!!

国府谷　盛明

千歳川放水路問題は当初〝自然保護か治水か〟という形で問題化し〝鳥か人か〟があたかも主要な対決点かのように宣伝されてきました。しかし、運動の進展とともに、千歳川放水路が果して治水にとって効果があるのかどうかが問われることになってきました。

石狩川水系治水工事の一環として位置づけられており、本流の水は千歳川放水路に分流して流れ、石狩川全体の治水に効果があるかのような印象を与えていましたし、多くの人もそのように理解していました。ところが、洪水時には石狩川本流と千歳川の合流点の水門は閉鎖し、石狩川の水は放水路には流れなく、放水路に流れるのは千歳川の水だけであることが理解されるとともに治水効果について疑問が生れてきたのも当然です。

開発局当局も、石狩川本流の治水には直接かかわらないことを認めざるを得なくなりました。

一方、千歳川流域のいわゆる石狩低地帯の水害は防げるのでしょうか。開発局が八月頃に説明会を開いた時には、資料の中に千歳川・千歳川放水路縦断面図というのが入っていました。この図によると、右岸も左岸も軒なみに計画高水位よりも地盤の方が低いことが示されていました。地盤よりも高いところを洪水を流すためには、高い堤防で囲まなければなりません。堤防で囲めば、逆に、周辺の低地にたまった水、いわゆる内水は千歳川に排出することはできなく、内水氾濫を防ぐことはできません。開発局は次の説明会からはこの図をかくしてしまい皆さんには見せていません。このことは、開発局も内水氾濫を防げないことを認めたものと言わなければならないでしょう。

この工事では、約一億立方米の土砂を捨てなければなりません。一億立方米といえば、一キロ四方で百メートル積み上げるという莫大な量でどこに捨てるのでしょうか。その捨て場所によっては新たな自然破壊を生じますし、この廃土の処分方法で工事費用も大幅に違ってきます。

ある治水学者は「石狩川本流そのもので、どのように水害を失くすか考えるのが当然で方法はいろいろある。千歳川放水路計画も一つの案と言うことは言えるが、邪道と言わざるを得ない。日本海に流れていた水を太平洋に流すというような自然にさからう計画はすべきではない」と指摘しています。

本州の場合、石狩県の洪水を胆振県におしつけるようなもので、このような計画や発想は生れて来ないでしょうし、胆

振県知事が先頭に立って反対するでしょう。北海道という単一行政区であり、国の開発政策主導型の慣れがこのような計画を許しているのではないでしょうか。

さて、この千歳川放水路がもし完成して、洪水が来た時どのような事態になるでしょうか。

江別市の石狩川本流と千歳川の合流点の水門では、本流側の水位は九・五メートル、千歳川は七・五メートルと、水門をはさんで、その水位差は誰にでも一目で判ります。洪水の水位が刻々と上り危険性が迫ってきた時、水位の低い方に水をぬいて欲しいということになるでしょう。

「水門を開けろ！」「広島や千歳を水浸しにするのか」「江別市民をみ殺しにするのか」

水門に住民が相対峙して水争いが起きる可能性を否定することはできないでしょう。

住民の安全を守るための治水が、住民の争いを新たに生み出したり、持ちこむものになりかねません。

石狩川本流の問題は、石狩川自体で解決していく努力をすべきであり、そのことは決して困難なことではありません。遊水池計画や河川断面を増大させ、河口部での放水路などその方法がある以上、この道を追求すべきです。千歳川放水路計画が出されてきたのは、開発局の延命策かとかんぐられるのも、このような努力の片鱗もみられないからです。

足尾鉱毒事件で闘った田中正造翁はいみじくも明治四十四年八月二〇日の日記に「古の治水は地勢による。恰(あた)も山水の画を見る如し。その山間の低地に流水あり。天然の形勢に背かず。……然るに今の治水はこれに反し、恰も条木を以て経の筋を引く如し。山にも岡にも頓着なく、地勢も天然も度外視して、真直ぐに直角に造る。これ造るなり、即ち治水を造るなり。治水は造るものにあらず。治とは自然を意味、水は低き地勢によれり。治の義を見れば明々たり」と、まさに、千歳川放水路計画への批判とも受けとめられます。

（日本科学者会議会員・札幌市在住）

ブナ原生林保護基金では、白神山系のブナ原生林の保護運動を中心として、全国各地のブナ原生林保護のための活動資金の協力を求めています。

一、「ブナ・シンポジウム」開催資金（六〇年六月八日～九日、東北地方で開催予定）

二、「一ミリ平方買い上げ意見広告」（ブナ林保護の意見広告を新聞に掲載するため、紙面一ミリ平方分を買い上げてほしいのです）

いずれも、一口千円、口数随意です。

☆ご寄付・お問わせ先☆

〒一〇五　東京都港区虎ノ門二―八―一

虎ノ門電気ビル四階　財・日本自然保護協会「ブナ原生林保護基金」事務局宛

電話　〇三―五〇三―四八九六

郵便振替　東京七―一一三〇三一

ウトナイト沼湿原植生と洪水

矢部　和夫

湿原の概況

本文でとりあげる湿原は、ウトナイト沼(註)湿原と、沼に流入する一支流であるトキサタマップ（川流域）湿原である。これらの湿原は地形的に異なり、前者は水位の不安定な氾濫原湿原に属し、後者は水位の安定している谷湿原に属する。ウトナイト沼湿原ではイワノガリヤスやツルスゲが優占するのに対し、トキサタマップ湿原ではムジナスゲやヤチスゲが優占する。このため、両者間で湿原の景観は非常に異なっている。

植生の分布を規制する要因

2つの湿原内に調査定点を多数個設置し、植生調査と並行して、水位の連続測定を含む10項目以上の環境要因の測定を継続的に行った。得られた資料は、主成分分析法によって統計的解析を行い、植生の分布を規制する重要な環境要因の抽出を行った。この結果、複数の要因が抽出され、それらは相互間の相関から次の3群に分類された。1）平均水位、2）水位の変動性、表層水の電導度、及び泥炭の分解度と厚さ、3）表層水の流動性、PH、及びDO（溶存酸素量）。

これらの要因のうち、最も重要な要因は平均水位であり、次に水位の変動性が重要であった。この事実は、湿原植生の分布が水位に関する2要因によって、主に規制されていることを示している。このうち水位の変動性は、水位の安定しているトキサタマップ湿原の植生と、不安定なウトナイト沼湿原の植生の違いを説明している。また、平均水位の勾配は、各々の湿原内での植生型分布パターンを説明している。このような水位勾配に沿った植生変化は、一般に湿生遷移を反映するとされている。

水位勾配と植生

トキサタマップ湿原では、低層湿原植生の分布は、水位勾配に沿って、抽水植物群落とハンノキ林の間に限られて分布している。一方、ウトナイト沼湿原では、ハンノキ林は広面積に分布しないため、低層湿原植生は広範囲に分布しており、かつ植生型は多様である。（低層湿原植生は陽生草本によって構成されるため、ハンノキ林に被陰されれば消滅する。）

ウトナイト沼湿原の氾濫

一九八一年八月の大降雨の際、トキサタマップ湿原では三―四〇cm水位が上昇したが、ウトナイト沼湿原では一二〇cmの水位上昇であった。この氾濫の際、ウトナイト沼湿原の優占種であるツルスゲは、水没後、ほふく茎を水面上に伸長させ、水没被害から回復する能力を持っていることを示した。また湿原内の各所で泥炭の浮上が起こり、その上で優占していたイワノガリヤスやヒメミズゴケはまったく影響を受けなかった。前述のように、ウトナイト沼湿原でハンノキ林があまり分布しないのは、頻繁におこる洪水によって、実生が定着できないためであろう。事実ハンノキの実生は浮上する泥炭上にのみ出現する。また氾濫によって富栄養な美々川の水が流入するため、湿生植物にとって栄養塩類が供給されるという有益な一面ももっている。

従って、ウトナイト沼湿原植生の特性は氾濫によって維持されている。また水位とその変動性が最も重要な要因である。これらの事実は、湿原保護上、絶対に水系に手を加えてはならないことを物語っている。

（北大・環境科学研究科・生態系管理学講座・札幌市在住）

(註)「ウトナイ湖」は植生上あるいは湖沼学上明らかに沼沢地である。このため旧呼称である「ウトナイト沼」を使用する。

北海道の自然を保全するためには…

北海道新計画についての意見

道は西暦二〇〇〇年（昭和七五年）を展望しながら北海道の進むべき方向を示す長期計画（仮称・新計画）の作成にとりかかっているが、その作成に当って道民の意向をきくべく一九八四年八月二七日、北海道自然保護協会にも意見を求めてきた。そこで当協会は九月三日に開かれた拡大常務理事会で各理事の意見を口頭ないし文書でもとめ、八木会長、片岡事務局長がそれを二十二葉の意見書にまとめ九月十七日、道に提出した。

この意見の内容はいずれも有用、具体的なものであり、意見書をさらに要約して会報に掲載するのが有意義であると考える。各意見はあえて分類していないが、おおよそ自然保全のための根底的問題から個別的問題の順に配列した。各提言の語尾の「―をはかる」、「―を行うべきである」は省略してある（紺谷）。

●土地利用の明確化＝利用すべき自然と、野生を保つために残すべき自然を明確に線引きする。

●私有林の公有化＝現在の私有林は細分されて売られたり乱開発が行われるなど自然破壊の舞台になっている。これを根本的に解決するため国、自治体が収用して国、公有林とすべきである。

●採石事業の計画化＝採石は自然景観を失うばかりでなく、災害の発生にもつながる大きな問題である。私有地もふくめて大きな網をかけて規制すべきである。

●海浜の自然の保全＝海浜を保全して海棲生物資源の回復をはかる。また渡り鳥の休息地である干潟を守り、鳥類の繁殖の場としての自然林を保全する。

●河川の自然環境の保全＝河川の管理は主務官庁の独自の計画に基いて行われているが、国土総体の計画の中におりこんで行われなければならない。防災管理の面から改修が行われ、自然に対する適切な配慮に欠けている。

●保護事業を公共事業として位置づける＝自然保護や街並保存などに地元自治体が消極的なのは金が伴わないためであるから、保護事業に事業費がつくように改める。小樽運河も保存が公共事業として地元に金が落ちるのであれば、市や議会も埋め立てに走ったりしなかっただろう。

●大型プロジェクトに対するアセスメント（環境影響評価）のあり方＝工事に着手するための免罪等としてアセスメントが行われているにすぎないのが実情である。計画の必然性、経済的メリットとデメリットの検討も当然行われるべきで、これに合わせて自然環境保全に関する検討も行い、総合的アセスメントとすることが必要である。日高山脈中部横断道路に関するアセスメントの問題点が、アセスメントのあり方の根本を問いなおしている。

●千歳川の太平洋放水路計画の再検討＝この計画により水害を防止できるかどうかは疑問であるのみならず、自然環境破壊の大きなことは立案者自身も認めている。石狩川自体について行うべき方策は多々あり、これをまず実行して当面の水害防止に努めるべきである。この計画についてはアセスメントを行い再検討すべきである。七〇〇〇年前にはじまった縄文海退以来の最大の人工的自然改造が実施されれば、単に地下水や河川の水の変化にとどまらず気象的変化も予想される。

●ナショナルトラスト運動への自治体の協力＝ナショナルトラストはもともと草の根的な運動であるが、個人的な努力のみでは限界がある。各自治体の協力が必要である。

●自然保護基金の設立＝自然保護上、重要な土地の永続的な保護を目的として官民からの出資、寄付などによって基金を設置し、土地の確保および管理を行う。

●野生交付金制度の創設＝山林原野など、保護すべき野生地域の保有面積に応じて、その市町村に交付金を出す。

●自然保境保全のための税制上の優遇措置＝自然環境保全のために指定された区域内の民有地の固定資産税を減免する。税を減免した市町村に対しては国が減免相当額を交付する制度をもうけるべきである。すでに減免を行っている自治体もあり、野生王国である北海道の自然を保護していくためには早急に導入すべき制度と考える。

●観光振興に関する指導方針の確立＝観光事業の振興と永続には自然の保全が、もっとも肝要であるにもかかわらず、観光のために自然の破壊が行われているのが現実である。道は、スイスはじめ欧米諸国の例にならい、自然を保全する十分な指導方針を確立し実行するべきである。

●一村一自然運動＝郷土の身近かな、愛すべき自然を対象に、「一村一自然」運動をおこし自然愛護精神の高揚をはかる。

●全道を全面禁猟区とする＝ゲームとしての狩猟は野生鳥獣を対象とする必要はない。全道に数か所の猟区を設け、そこに人工増殖した鳥獣を放飼して狩猟を行うべきである。

●廃鉱・廃山跡の自然の回復＝鉱山は渓谷にめぐまれているものが多く、冷水を好むサケマス科の魚類の養殖に利用することができ、紅葉の名所となる。旧市街や炭鉱住宅跡などは簡易宿泊の集落をつくることができる。このようにして新しい観光資源として活用すべきである。

●自然保護教育の充実＝義務教育における自然保護教育の充実は特に重要である。できるだけ各地域の自然に立脚し、実地をふまえた教育が肝要である。

●環境保全研究所の創設＝道立公害研究所はすでに大きな成果を収めており、こ

れを発展的に改組して自然保護などを組み入れた研究所とする。

●緑の街並景観の創出＝北海道の寒地住宅はヘイを必要とする度合いが少ない。ヘイの代りに生け垣や内部のみえるサクにするよう奨励し、同時に街路の緑化をはかり、緑の連続した街並景観を創出する。公共施設は率先して、これを実行する。モデル地区の民家に対しては補助金交付、前庭部分の固定資産税の減免などを行う。緑化植物は地域の特性を生かし、一村一自然的緑の景観とする。

●道路の事業対象の拡大＝道路の整備にあたっては、いままでのせまい意味での土木工学的発想から環境創造の発想をとり入れて対処すべきである。具体的には道路と、そのわきの緑化、便益施設（駐車場、展望休憩所など）を一体的に整備しパーク・ウエイあるいはロードサイド・パークを創出する。

●野外広告の規制の強化＝現在の野放図な野外広告、看板などにきびしい規制をくわえるべきである。スイスやギリシャでは野外広告はほとんどみられない。これが自然を美しくしている。

●空カンのデポジット（手付け金）制の条例化＝野外にみられるゴミの大部分は空カンであり、もはやモラルをもってしても規制できない。アメリカでも数州がデポジット制にふみ切っている。日本のビールびん、一升びんはよい先例だった。これにならいカン一個に一〇～二〇円のデポジットをおき、その費用は製造業者、販売業者および利用者が分担して空カンの回収、再利用を行ってはどうか。

モエレ沼 自然観察会

高畑 滋
（農水省林業試験場研究室長）

九月十六日、モエレ沼探勝会がひらかれ、五十名の参加者があった。モエレ沼は古い時代に豊平川の流路が、古伏篭川を通っていた頃の名残りだそうで、八木会長の説明によれば、このほかにも豊平川がこのあたりを通っていた証拠がたくさんあるそうだ。一八九六年（明治二九年）の地図には、現在のモエレ沼の下流に、もっとはっきりした沼があって、これをモイレ沼といっていた。ここから流れ出た川は伏篭川に合流して石狩川に通じていた。川幅の大きさと、蛇行の様子からいって、この支流が豊平川の本流となって、水量豊かに流れていたのだろう。元のモイレ沼は浅かったので、大正の初めに干上ってしまい、蛇行していた部分がひらがなの「つ」の字の形の沼として現在まで残った。このような立派な歴史をもつモエレ沼も、都市化する札幌のために、ゴミ埋立場となり、見るも無残な姿になってしまった。札幌市ではゴミ埋立ての跡地を公園にしようとして計画書ができている。できるだけ太古の自然がしのばれるような、湿原景観を生かした公園づくりがされるように希望したい。探勝会当日目にふれた植物を書きあげれば下記のようである。

ヨシ	エゾミソハギ	ヘラオオバコ	イシミカワ
ガマ	イガオナモミ	フキ	イヌホウズキ
フトイ	センダングサ	ゴボウ	ユウゼンギク
コウホネ	タウコギ	ブタナ	ヤマホロシ
ヒシ	アキノノゲシ	アカザ	アカツメクサ
オオヨモギ	エノコログサ	オオバコ	シロツメクサ
ナガボノシロワレモコウ	ミゾソバ	ドクゼリ	イヌタデ
ケイヌビエ	アカバナ	オオアワガエリ	ミチヤナギ
コヌカグサ	アメリカオニアザミ	ヒロハウシノケグサ	メマツヨイグサ
カモガヤ	オオツメクサ	ヒメジオン	ゴキヅル
セイタカアワダチソウ	ホウコグサ	エゾノギシギシ	シロネ
オオアワダチソウ	ゲンノシヨウコ	ニガナ	エゾノアブラガヤ

モエレ沼にて詠む…

新妻 博（当協会副会長）

高行きて青鷺一羽沼の秋

板の橋渡りて蒲の穂がそろう

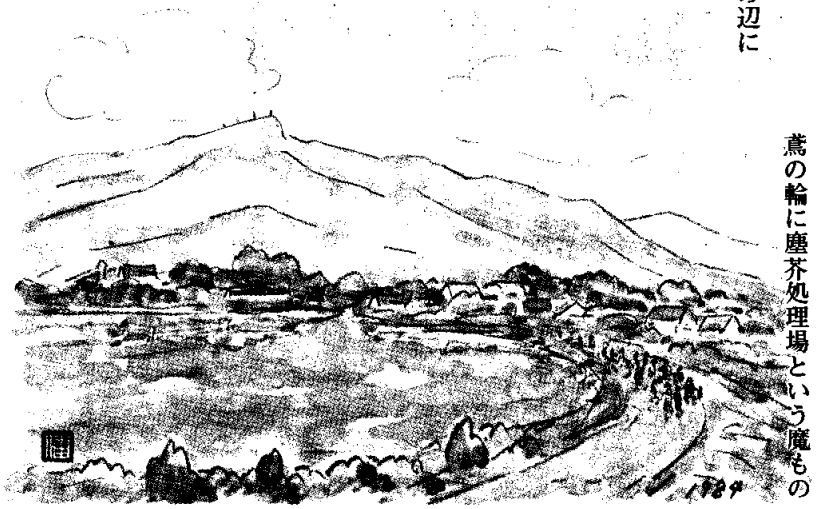
秋の蝶さまようことを沼の辺に

沼荒れて田螺のむくろ二つ三つ

芦原はみな穂を垂りて渡り鳥

蒲の穂並根こそぎ倒し公園化

鳶の輪に塵芥処理場という魔もの



スケッチ：八木 健三（当協会会長）

自然と共に生きてゆく…それがボクのライフ・スタイル！

河村　通夫（ナチュラリスト）

インタヴュアー：**鹿士　政春**（北海道美術家協会会員）

河村さんは十八年前、京都から札幌へ移住、音楽店「パフ」の経営を経て、現在STVラジオのパーソナリティー、テレビの料理番組などに出演。ラジオの「河村通夫の桃栗三年」の中で「米ヌカ」の効用を全道的に広める一方、自然と一体となったライフ・スタイルを作るべく、自らの手で空知の美流渡の地を開墾し、木造の家を建て移り住んでいる。

今回はその美流渡の河村さんの家へお邪魔してお話しを伺って見ました。

Q□最初からちょっと抽象的な質問ですが、河村さんにとって自然とはどう言うものなのかしら？

河村■う～ん。ボク対自然と言う事ではなく、ボクも自然の一部だと言う事だと思うな。特に今は山暮しだから、実体験として、自然に生かしてもらっていると言う感じが強いですね。

Q□自然と人間との共存と言う事がさかんに言われますが、開発と自然との兼ね合いに付いては…。

河村■まず、極端に人間の都合に合せて作ったのが都会だと思うんですよね。でも田舎と言うのは、そんな便利さだけが優先するものでもないしね。たとえば、大都会の札幌のね、豊平川にサケを上らせようなどと言う発想もね、それは都会人のエゴですよ。サケが帰って来たからと言って、豊平川が自然の川にもどったなどと思うのはね…。都会の便利さと、豊かな自然とを同時に手に入れようとするのは無理なんですよ。どちらかを手に入れようとしたら、もう一方を捨てないとね。Aと言う女性とさ、Bと言う女性とね、両方ほしいなんて言ったってさ、それはうまく行かないでしょう（笑）。それにしても、自然保護を語る時にね、一番大事な事は、机の上や文字の上の問題よりもね、一人一人がいかに自然の中の一員として生きているか又、毎日の生活の中で自然に対して罪を犯さないで生きているかどうかだと思うね。さっきのサケの話しに戻るけど、サケが豊平川に帰って来たと言って、ドッと人が観に行くけれどさ、その後の河川敷のゴミね！あれでは自然について語る資格なんかないよね。

Q□北海道へ来て十八年だそうですが、河村さんにとって北海道の魅力とは、どんなものなのかしら。

河村■勿論、自然の豊かさもありますが、北海道と一八〇度違うのがボクのいた京都だと思うんですよ。文化にね、貴族文化と庶民文化があるとすれば、京都は貴族文化でしょうね。匠の細工にしても四〇年も五〇年も修行しなければ出来ない仕事ですよね。すなわちオーソリティーでなければならないのよね。その点、北海道の良さはオールマイティーですよ！ボクがね、人並程度の事でいいから、いくつもの事柄をやりたいと思うのはね…。開拓と言う仕事は何んでも出来ないと駄目なんですよ。自然に対してはソリストでは生きて行けないんですよ。オールマイティーでないと駄目なんですよね！だから昔ね、開拓で入った人達も、雪を知っていた人達は生き残ったでしょうし、オールマイティーで色んな事の出来た人達だけが、厳しい北海道で生活出来たわけですよ。だから今の北海道人と言うのは選抜淘汰されて来た人達ですからね。皆んなオールマイティーなんですよ、北海道人がそれに気付いてないだけなんですよ！

札幌のような大都会でもね、多くの人は田舎暮しの経験を持っているだろうし、札幌と言ったって、こんな大都市になったのは、ここ二〇年、三〇年の事でしょう、だから、街の団地なんか見ても、あちこちで漬物の大根なんか干しているものね。漬け方を皆んな知っていると言う事なんですよ。素晴しいですよ！東京や京都ではもう見られませんからね。

Q□以前の河村さんを知ってる人は、急激に生活が変ったと思う人もいるでしょうね。

河村■いきなりね、山で暮そうと思ったって出来ないですよ。やっぱり畑だって、一人前の事やろうと思ったら、最低一〇年かかりますよ。ボクも小さい畑だったけど一〇年札幌でやって来たし、家だって、作り方なんか自分なりに試行錯誤しながら一〇年ぐらい来てますからね。それにしてもボクの場合、毎日の暮しと言うか、生活にものすごく興味があるから、外国へ行って見たいとか、そう言う事があまりないのね。目の廻りに解らない事がいっぱいあるからね。いまだ目の前を旅しているのね。だから遠くへ旅する余裕がないって言うのか…。

Q□河村さんのこれからのライフ・スタイルはどうなって行くのかしら。

河村■解らないね（笑）。マキを切る事と、畑を耕す事は、何があろうとボクの生活のベースです。それ以外の事は、今後ボクがどれだけ勉強して行くかと言う事なんでしょうね。それにボクの場合、たいがい仕事が後からくると言うか…。だからレコードを出すと言っても、レコード・ミュージシャンになりたいと言う事ではなくて、ただ音楽をやりたいと言うだけだったんですよね。テレビの料理番組にしても、料理は自分の為にやって来た事だし、音楽も料理も自分が好きでやって来ただけなんですよ。

ただ、ボクが死ぬまでにやって見たいと思うのは「現代版・自給自足の百科事典」とでも言うような本を作って見たいですね。夢ですけどね。でも、そう言う夢があると、人間って、一生懸命勉強するんじゃあないかな…！

Q□多忙の中、ありがとうございました。今後、河村さんがどのように変って行くのか、私も興味深く見て行きたいと思っています。又、益々のご活躍を…。

協会の活動

○昭和五十九年八月二十六日（日）
道自然保護団体連合代表者会議
場所　道央地区勤労者山岳連盟事務所
出席　狩野理事
議題　日高横断道路計画に対する今後の取り組みの件

○九月三日（月）
五十九年度第五回常務理事会
主な議題
一、日高横断道路の件
二、新北海道発展計画に対する意見書の件
三、創立二十周年記念事業の件

○九月十二日（水）
千歳川放水路計画勉強会
講師　国府谷盛明氏
出席　八木会長、長谷川常務理事、滝口、鹿士、福地の各理事、片岡事務局長

○九月十三日（木）
情報公開シンポジウム
主催　北海道
場所　自治会館・札幌
出席　片岡事務局長

○九月十四日（金）
・北海道自治研修所研修講話
主催　北海道
場所　北海道自治研修所
講師　八木会長
・第三十九回「全国野鳥保護のつどい」北海道実行委員会設立準備会
主催　北海道
場所　道庁別館
出席　片岡事務局長

○九月十六日（日）
自然観察会
場所　モエレ沼周辺
講師　高畑　滋氏
参加者　五十六名

○九月十七日（月）
・日高横断道路懇談会
場所　北農健保会館
出席　八木会長、新妻副会長、長谷川常務理事、滝口、福地の各理事、石川俊夫、高畑　滋、大坊幸七、清水朋子の各氏、片岡事務局長
伊藤道道路課長、倉知課長補佐、島主任技師、平川技術第一係長、飯塚計画第二係長、山本技術係主任、金森帯広土現道路建設課長、草野道自然保護課長、宮腰課長補佐、松原公園計画係長、内藤技師、小野技師
概要　道側よりの今年度着工部分（延長三〇〇m）の概要説明の後、活発な質疑応答を行った。また、今後とも、具体的意見を申し入れ、お互いの意志の疎通を図り、最悪の事態は回避したい旨の合意をみた。
・「新計画検討に係る全道的団体意向調査について」（意見書）を道知事あて提出

○十月十四日（日）
自然観察会
場所　釜谷臼の三日月湖周辺
講師　本間賢次氏
参加者　二十九名

○十月二十五日（木）
記念講演会―阿寒・大雪山両国立公園指定五〇周年、当協会創立二〇周年―
主催　当協会、道新
後援　環境庁、北海道、北海道自然公園協会
場所　道新大通館
講師　加藤多一氏、辻井達一氏、俵　浩三氏
参加者　一七〇名

○十月二十六日（金）
千歳川放水路計画勉強会
出席　八木会長、新妻副会長、長谷川、成瀬各常務理事、滝口、鹿士、福地の各理事、田中明子氏、北條紘次氏、片岡事務局長

○十月二十七日（土）
第九十三回理事会
主な議題
一、昭和五十九年度上半期事業報告、決算報告の件
二、日高横断道路計画の件
三、新入会員の承認の件
四、二〇周年行事内容の件
五、千歳川放水路問題の件
六、監査報告の件

○十一月三～四日
ナショナル・トラストをすすめる全国の会第二回大会
主催　ナショナル・トラストをすすめる全国の会
後援　みどりのまち・かながわ運動推進協議会、環境庁、神奈川県
場所　神奈川県政総合センター
出席　片岡事務局長

○十一月三日（土）
千歳川放水路計画現地調査
調査　八木会長、福地理事、三木研究員

○十一月四日（日）
・自然観察会
場所　野幌原始林
講師　野村梧郎氏
参加者　十六名
・横津岳現地調査
調査　八木会長、宗像理事

○十一月七日（水）
湿原シンポジウム
主催　当協会、道泥炭地研究会、道農村環境研究会、釧路市立博物館、釧路自然保護協会、釧路市立博物館友の会
後援　㈳北方圏センター
場所　釧路市立博物館
提言者　辻井達一氏、角田憲治氏、山上重吉氏、清水雅男氏
参加者　一二三名

○十一月十日（土）
千歳川放水路計画勉強会
出席　八木会長、新妻副会長、斉藤、成瀬、長谷川の各常務理事、滝口、紺谷の各理事、高橋英紀氏、大畑孝二氏、北條紘次氏、片岡事務局長

○十一月十二日（月）
五十九年度第六回常務理事会
主な議題
一、千歳川放水路計画の件

○十一月十六日（金）
「千歳川放水路計画再検討に関する要望書」を道開発庁長官、環境庁長官及び道知事あて提出した。

行事のご案内

（問い合せ、参加申し込みは、事務局〇一一―二五一―五四六五まで）

★北の自然を描写・記念展・チャリティ展

―阿寒・大雪山両国立公園指定五〇周年記念、歩々の会坂本直行追悼記念、当協会創立二〇周年記念―

主催　当協会
共催　歩々の会
会期　昭和六十年二月十四日（木）～二月十九日（火）
会場　札幌丸井今井デパート一条本館八階催場
（最終日は四時二十分で終了します）

寄贈図書

○『雷電山の植物』（原　秀雄）岩内町＝寄贈・辻井達一
○『道東海岸線総合調査報告書』（澤四郎他）釧路市立博物館＝寄贈・釧路市立博物館
○『NORTH・ART丹頂の四季』（岩松健夫・原田康子）須田製版企画出版＝寄贈・同上
○『ウッドペッカー・大雪山自然観察講座Ⅲ記録誌』大雪山自然観察講座を記録する会他＝寄贈・東川町教育委員会
○『常設展示資料目録』釧路市立博物館＝寄贈・同上
○『魚類標本目録1』釧路市立博物館＝寄贈・同上
○『昆虫標本目録1・2』釧路市立博物館＝寄贈・同上
○『植物標本目録1』釧路市立博物館＝寄贈・同上
○『文化財裏ばなし下巻』（おの　よしお著）苫小牧郷土文化研究会＝寄贈・同上
○『解説シリーズ・釧路湿原』釧路市立博物館＝寄贈・同上
○『解説シリーズ・釧路のあゆみと産業』釧路市立博物館＝寄贈・同上
○『羽幌の文化』羽幌町文化連盟＝寄贈・羽幌町教育委員会
○『天売史』羽幌町教育委員会＝寄贈・同上
○『第二回自然環境保全基礎調査・海域生物調査報告書』北海道＝寄贈・加藤清
○『第二回自然環境保全基礎論査・海域環境調査報告書』北海道＝寄贈・加藤清
○『第二回自然環境保全基礎調査・日本の重要な植物群落』環境庁＝寄贈・加藤清
○『国立・国定公園特別地域内指定植物図鑑・北海道編』環境庁＝寄贈・加藤清
○『南部シベリアのヒグマとツキノワグマ』（藤巻裕蔵他訳）北菀社＝寄贈・加藤清
○『御岳山の自然観察』財・日本自然保護協会＝寄贈・同上
○『国立公園指定五〇周年記念・阿寒国立公園の三恩人』（種市佐改著）釧路観光連盟＝寄贈・種市佐改
○『国立公園指定五〇周年記念・目で見る阿寒国立公園史』（種市佐改編）阿寒国立公園広域観光協議会＝寄贈・種市佐改
○『尾瀬の湿原をさぐる』（堀　正一著）築地書館＝寄贈・八木健三
○『群馬の自然とその保護』（堀　正一著）築地書館＝寄贈・八木健三

☆右記の書物・資料は閲覧できますので、ご希望の方は事務局までお越し下さい。

☆図書寄贈のお願い

自然環境、自然保護に関する図書を収集し、当協会の活動を充実させていきたいと思います。どうか、図書をご寄贈下さいますようお願い致します。

当協会入会方法!!

年会費＝個人会員（A）三、〇〇〇円　個人（B）二、〇〇〇円（同一世帯でたとえば夫婦・親子・兄弟など二名以上の場合二人目から）学生会員＝二、〇〇〇円、団体会員＝一〇、〇〇〇円（一口）

会費納入＝北海道拓殖銀行本店〇一七二五九　北海道銀行本店一〇一四四四、郵便振替口座・小樽一―四〇五五

―編集後記―

★年末の慌しい中、会員の皆様にはいかがお過しでしょうか。支笏湖レジャー施設や、千歳川放水路計画等々、課題を来年以降に残したまま今年も終ろうとしています。

★「自然と人」のインタビューで、美流渡まで行って来ました。会報が一新されてから初めての出張取材です。木作りの素晴しいお宅でお話しを伺って来ました。私も今年の七月頃より「米ヌカ」を食べているのですが、今回のインタビューを通じて、益々「米ヌカ」のファンになりました。帰りには河村さんの畑で採れた白菜の漬物などお土産を戴いて来ましたが、皆様にお分けする訳にも行きませんし又、不公平な事にならないようにと、私一人でおいしく戴きました。謹んでご報告申し上げます！

★取り上げるテーマが多く、毎回増ページの会報、会計も大変です。皆様、会員拡張にご協力を！それでは皆様良いお年を…。(S)

昭和五十九年十二月二十五日発行
〇六〇　札幌市中央区北一条西七丁目
広井ビル五階
発行所　社団法人　北海道自然保護協会
電話（〇一一）二六一―六五八六（代）
（〇一一）二五一―五四六五（直）
郵便振替口座小樽一―四〇五五
北海道拓殖銀行本店　〇一七二五九
北海道銀行本店　一〇一四四四
発行人　八木　健三
印刷　特急印刷株式会社